

## Part 3

コミュニケーション編

# 薬の説明は？ 自殺をほのめかされたら？ 信頼関係を築くための 服薬指導7つのポイント

「副作用をどう話せばいいか」「薬剤師の一言が治療に悪影響を与えないか」など、頭を悩ますことが多いうつ病患者の服薬指導。ここでは、患者の話を上手に聞き、信頼を得るためのポイントを紹介する。

### Point 1

#### 「抗うつ薬」と明言せず 効果をしっかり説明

「精神科領域の薬では、服薬への不安や抵抗感を持つ患者が多い」とハーブ調剤薬局稲沢店（愛知県稲沢市）管理薬剤師の大岩眞二氏。特に初めて抗うつ薬が処方された患者には、不安を与えないような説明の工夫が求められる。

同薬局は、精神科専門薬局を展開するハーブ（愛知県豊田市）のフランチャイズ1号店。精神科薬物療法認定薬剤師でもある大岩氏は、「抗うつ薬とストレートに伝えることを避けて、効果を前面に出して説明する」と言う。医師からうつ病だとはっきり伝えられていない患者や、聞いていても受け入れ

たくない気持ちが強く「自分はうつ病じゃないのでは」と思っている患者は少なからずいる。そうしたケースでは、「うつ病の薬」と言ってしまうと、「私は違うから服薬しない」となる可能性が高いからだ。大岩氏は、「不安や緊張を取る薬」と、効果を中心に説明し、「不安や緊張があったり、ふさぎ込んだりすることがありますか」と聞き、本人の症状と薬が合っていることを確認する。

一方、精神科病院の近隣にある、あけぼの薬局内守谷店（茨城県常総市）管理薬剤師の清水朋子氏は、「今のあなたのつらい症状を改善するための薬です」と説明するという。

また、その日の症状によって薬を増減する患者が多いことから、「つらい症状を取るには、医師の指示通りにきちんと飲むことが、とても大切なことです」と、用法通りに飲むように念を押す。

さらに清水氏は、「分からないことや不安なことがあったら、いつでも電話をください」と、夜間でも通じる連絡先を教える。いつでも薬剤師に相談できることが、患者にとって安心感につながる。

#### 医師の説明とすり合わせを

患者を不安にさせ、治療を妨げることにもなるのが「医師の処方如有疑问のような薬剤師の一言」と東京厚生年金病院

（東京都新宿区）精神科・心療内科主任部長の大坪天平氏は指摘する。同氏は、「ベンゾジアゼピン系の薬は依存性があるので、あまり飲まない方がいい」「同じ系統の薬が2種類も出ているのは意味が分からない」など、処方に対する意見や疑問を患者に伝えてしまう薬剤師がいることを問題視する。

医師は、薬の良い点と悪い点を十分承知した上で、必要な治療と考えて処方していることが多い。また、薬の切り替え時には、同系統の2剤が併用されることもある。「正しい指摘であっても、悪い点のみを伝えられると、患者の治療に悪影響を及ぼす可能性がある」と大坪氏。慎重に服薬指導を行う必要がある。処方に疑問を感じたら、まず「医師からはどのように聞いておられますか」と医師の説明とのすり合わせを行うことが大切だ。

### Point 2

#### 「副作用だけ」はNG 継続するようサポートを

副作用の説明は、患者を不安にさせる要因の一つだ。しかし、伝えなければいいかという、そうともいえない。SSRIなど最近主流の抗うつ薬は、効果よりも副作用が先に表れることが多い。このことを知らされていないと、副作用が発現したとき、患者が驚いて服薬を勝手に中断してしまったり、治療を受けなくなってしまうこともあるからだ。

前出の信愛クリニック院長の井出氏は、「副作用を伝えるときは、ネガティブな情報だけを伝えるのではなく、ポジティブな言葉で締めくくるようにしてほしい」と話す。例えば、吐き気の副作用について「服薬初期に、胃がむかむかすることがあるかもしれませんが」とだけ伝え、副作用に対する不安が頭に残る。プラセボ効果で、副作用を誘発することにもなりかねない。

一方、「飲み始めにはむかむかする



「薬剤師の支援によって服薬継続率を高めることができる」とハーブ調剤薬局稲沢店の大岩眞二氏。